論説

「墓の移動」を通じた「沖縄」研究の再考

ー沖縄・墓・人類学ー

越智郁乃

はじめにー問題の所在ー

「死」とは人間の文化的営みの中でいかなる仕方ではあれ、何らかの解決を必要とする問題（内堀・山下 1986：2）であり、葬送儀礼とともに墓がその「解決」に重要な役割を持つことは、おそらく多くの社会においてもあてはまることであろう。沖縄において墓は「あの世の家」と表現され、「人間は借家住まいもできるが、死人の借り墓はできない」という言葉が繰り返し語られる。その表現の含意は「祖先を大事にすれば子孫も繁栄し、祖先を粗末にすれば、子孫がどんなに立派でも祖先からの祟りがある」ということである。したがって、人間の住まいは祖先の墓との関係性で規定されるため、日取りから場所の選定などの墓地風水が重要視されるように、生者の住まいとしての家屋と死者の家である墓は連続性を持っていると論じられてきた（渡邊 1994：119）。

しかし都市部の狭小な土地における墓の増加は、生者の生活環境に異なる影響を及ぼしている。第二次世界大戦後、沖縄各地からの人口移動によって形成された那覇市を中心とする沖縄本島中南部の都市部は、様々な出身地を持つ人が生き、そして死んでいく場所である。その都市部での人口増加と都市化に伴って拡大した無秩序な墓地は、景観上の問題を生じさせ生活環境の悪化を招くとみなされ、墓地に対する適切な行政対応が求められるようになった（沖縄県福祉保健部 2001：4）。そして現在では都市計画や区画整理によって対象となる区画内にある墓の改葬を契機に集団墓地が形成され、現在増加の一途を辿っている。また、埋葬許可に関しては法務省、厚生労働省や市町村などの行政による管理が行われる対象であるように、墓はそれを祀る

親族だけではなく複数の主体が関わり「操作」されるものである。このような状況の中で、出身地に残してきた墓を現在の居住地近辺に移動する事象、すなわち「墓の移動」[1]が生じている。

当該地における「墓の移動」とは実際に墓石を移動させることではなく、墓郭内の遺骨、香炉などを移動させることを意味する。八重山の習俗を生活者の視点から著した『八重山生活誌』において宮城は、「(第二次世界大) 戦後は本土や本島に職場を求める者が急増し、家族引き揚げの家庭が年々多くなり、墓所を移動しはじめている」と述べていることから(宮城 1972:493)、移動先において新たに墓を造営する家族単位の移動者の増加がうかがえる。また「遺骨を引き揚げる時には、これまで洗骨されている遺骨は合同して焼き、小さくしてお伴するようになっている」とその移動の様子についても著述されている。

しかしこのような「墓の移動」については、これまで積極的に研究されてはこなかった。それは「伝統的な墓」から抜け出した「新しい墓」に対して研究者の側から、また現地の人々からも「沖縄の墓」としての価値付けがなされてこなかったことが理由として挙げられる。そしてその背景には、地域研究としての「沖縄」の取り扱われ方が大きく関わっているのである。そのため本稿では、先行研究を概観しながら「墓の移動」に関する研究の位置づけを行うことで現代沖縄を対象とした地域研究について人類学的見地から再考し、新たな「沖縄」研究に対する視点を提供することを目的とする。

本稿は以下のような構成とする。第 1 節では沖縄の地域研究の総称である「沖縄学」の成り立ちと、「沖縄学」が現地出身研究者のアイデンティティ形成と関わっていることを明らかにし、第 2 節では「日本」側の人類学 (民族学) 研究者らが注目した出自集団「門中」に関する研究の興隆と、沖縄において親族論が再考されないままに衰退した現状について触れる。第 3 節では、人類学 (民族学) とともに「門中」に注目してきた民俗学が「現在」の変容する沖縄社会で民俗事象を取り上げる際に直面している困難について、「沖縄人」としてのアイデンティティと学問における「政治性」という問題から述べ、近年注目されている「移動者」を主体的に捉える研究について触れる。これらの議論を踏まえ、第 4 節では葬墓制に関する研究とその変容 (火葬、

集団墓地の普及）から変容する社会を積極的に捉えるために「墓の移動」に注目し移動者の実践を主体的に捉える必要性について述べ、最後に新しい「沖縄」研究に向けた視点を論じる。

1.「沖縄」と沖縄学

沖縄に関する人文社会諸学による研究は、その総称として「沖縄学」と呼ばれてきた。明治期に「日本」に組み込まれた「沖縄」には、考古学、民俗学、人類学の分野から笹森儀助[2]、鳥居龍蔵[3]らが調査のために訪れている。「沖縄学」は複数の学術分野からなる研究がその端緒にあり、本土出身者だけではなく現地出身の研究者が多いことから、当該地域のアイデンティティ形成の営みと一体化している点に特徴がある（与那覇 2008：86）。伊波普猷（言語学、歴史学、民俗学）[4]、東恩納寛惇（歴史学）[5]らは、日清戦争以降の同化志向が高まる中、沖縄人は日本人と同一の民族であるという日琉同祖論[6]に立脚した研究を行った。彼らの業績は一面で明治日本による琉球王国の併合を正当化する役割を担いつつも、一方では内地人による沖縄人差別や、現地文化の破壊を批判する側面も持っていた。この二面性は支配の道具にも抵抗の手段にもなるというナショナリズムに対する沖縄学が有する両義性の反映であり、第二次世界大戦後の米軍統治期には、日琉同祖論についての学問的議論が沖縄の帰属をめぐる政治的主張と表裏一体の形で展開された。

一方、大正時代後期に「南島ブーム」が発生して以来、柳田國男、折口信夫らの民俗学者も沖縄の民俗文化に注目している。このような流れの中に、出自集団「門中」の発見がある。

2.「門中」と人類学（民族学）

「門中」発見当初は、日本の「家」「同族」[7]との比較研究が主に行われていた。しかし、第二次世界大戦後しばらく海外調査が困難だった時期にはフィールドワークの「訓練場」として、また後にアジア、アフリカに向かう日本人人類学（民族学）者らによって異文化研究の手法を援用した研究が行われるようになる（崔ほか 1996：469、与那覇 2008：86）。

人類学の歴史において「親族」は常に主要な研究テーマのひとつであり、

戦後に沖縄社会が人類学の研究対象として認知されるようになると、1960年代までに興隆していた欧米の親族、出自に関する人類学的理論の影響を受けて次々と研究者が沖縄に入った[8]。そこで特に注目が集まったのが、父系出自集団とされる社会集団「門中」である。「門中」は父系出自を辿って互いに結ばれている人々からなる。家の男子規定・長男規定相続に基づき多くの分節を抱えたヒエラルキーを形成した排他的出自集団であり、その多くは同一の墓「門中墓」を共有すると説明される。「本土復帰」を跨ぐ1970年代から1980年代にかけての激動期において、沖縄本島及び周辺離島に存在するこれらの集団のもつ原則、差異、そして近代の社会変化を背景とした「門中」の変容過程に研究の関心が集中してきた（渡邊1990：70）。

この「門中」の機能的特徴は祖先祭祀にあり、とりわけ課題に挙がってきたのが「位牌祭祀」の問題であった。例えば沖縄本島を中心とする地域には、①父系祖先以外の位牌を祀らない、②娘に家を相続してはならない、③同じ父系でも死後兄弟の位牌を併祀してはならない、④長男の位牌を排除してはならない、という四大禁忌が位牌祭祀における規範として存在する。しかし、このような禁忌規範が不徹底であった他の地域では、「シジタダシ」とよばれる父系の貫徹化の理念と実際の慣行との齟齬の問題が重要視されるようになった。一方で「門中」がみとめられない地域の研究として、先の位牌禁忌がまったく存在しない奄美地域や、男子規定はあくまで選択的なものである八重山・宮古地域の位牌祭祀の様相が報告されるなど、位牌祭祀の研究は沖縄社会の祖先と子孫との関係のヴァリエーションに関する新たな確認に貢献することになる（渡邊1990：71）。

このように、沖縄社会における研究は社会集団の出自、相続、継承、帰属など人間関係のタテの繋がりに集中してきた。沖縄のどの地域でも絶えず問題視されてきたのは、「門中」に内包された原則とその異同と変異の問題であった。それゆえ今後の研究発展を考える前に、出自論の再検討を含めてこれまでの研究の見直しを図る必要があると渡邊は指摘している（渡邊1990：74）。しかし研究者の多くが親族研究の本場である「海外」へと流出するようになると、沖縄社会における親族研究は下火になる（HARA 2007：114）。渡邊が指摘したような研究の見直しは必要とされながらも行われていないの

が現状であり、さらに先述したように、他（多）地域から流入した人々で形成された本島都市部の現状に即した研究は、今日ほとんど行われていない。

3．民俗学と「沖縄」

一方、人類学とともに「門中」の組織と祭祀構造の研究に関わってきた沖縄民俗学では、その呼称自体が妥当かどうかという検討が比嘉によってなされているように（比嘉 1996：437)、「沖縄」の一様性だけではなく多様性を歴史の中で再検討する作業が必要とされている。例えば、「沖縄」の呼称は沖縄本島および周辺離島以外に宮古島を中心とした群島、石垣島、西表、与那国、波照間などの島嶼からなる八重山群島からなる沖縄県という行政区分に対応している。しかし県内において、特に宮古や八重山の人々にとって「沖縄」といえば沖縄本島地域を指す言葉である。そのため奄美なども含めたかつての琉球王国の領土である琉球列島における研究領域の構築を目的として、「琉球民俗学」を提唱する動向が認められるが、このような動きの背景には民俗学における複雑な「政治性」があると指摘されている（吉成 2007：56)。

柳田が立ち上げた日本民俗学成立当初の事情を振り返ってみると、圧倒的な優位に立つ西欧近代文明の波が押し寄せてくるなかにあって「日本的なるもの」「日本固有のもの」とは何かを探る研究が行われたことから、国家としてのアイデンティティ形成と民俗学の成立が軌を一にしていることがうかがえる（吉成 2007：57－58)。しかし「日本的なるもの」とは内的な規定とともに、その外部から、ことに東アジアの他の社会との比較から確定せざるを得ないことになる（鈴木 1991：202)。「沖縄」は原日本を映し出す鏡としてその重要性が認識されていたが（崔ほか 1996：468)、その「沖縄」に関しても内的な規定とともに外的な規定を必要としていた。吉成は「沖縄」「日本」という枠組みの中で民俗を論じる際には、常に政治性が付きまとうと述べている。それは本土の研究者が「沖縄」を論じる際、意識・無意識に関わらず対象に対する視線、あるいは問題の設定の仕方そのものの中に本土の歴史的・政治的優位性という立場が反映されている可能性があるためである。それは琉球列島内部においても入れ子のように相似形の問題として存在している。奄美、宮古、八重山に対して、かつての首里王府が存在した「沖縄」の

優位性という脈絡があり、こうした政治性が絡み合って民俗学というひとつの研究領域が存在しているのである（吉成 2007：59－60）。

さらに吉成は、比嘉の提唱する「琉球民俗学」を事例に沖縄の民俗事象を一般化・体系化しようとする際に起こる問題に関しても論じている。「琉球民俗学」の基礎となる報告や論考は膨大な蓄積があるが、島嶼ごとの多様性は一般化、体系化を許さないものがある。しかし一般化しない傾向は、外部の研究者よりも地元の研究者に顕著であるという（吉成 2007：62－63）。戦後、特に 1950 年代からの民俗調査や方言調査の機運の高まりとともに多くの成果の蓄積がなされたが、地元大学における研究サークルの指導者たちは柳田、折口の影響を受けた人々であった。そうした指導者たちの影響を受けた学生たちの自らの文化への関心は、民俗や言語などの地域の文化を正確に記述すること、地域ごとの差異を明らかにすることに集中していた。その後、調査活動の進展に伴い民俗事象の地域的差異が著しいことが明らかになる一方で、戦前から戦後一時期までの間になされた一地域の民俗を記述することによって全地域を代表させるような記述のあり方に対する批判から、いっそう民俗事象の差異に関心を向けはじめることになったのである（比嘉 1996：438－440）。それゆえ比嘉は「門中」にみられる地域差を例に上げ、どれをモデルとして「沖縄」の門中の祭祀構造を説明するかの判断は難しいと論じる。さらに「過去」に位置付けられた自己完結的な社会を対象にしてきた傾向のある民俗研究において、変動が激しく、一つの社会を規定するような文化の境界が不明瞭になってきつつある状況の中で民俗事象の一般化という営為がどのような意味を持つのか深く考えざるを得ないと述べ、地域の学として民俗学の目指すものは民俗事象の一般化よりも、他地域の文化との対比のなかで抽出される特徴を見出し体系化することではないかと指摘している（比嘉 1996：441－445）。

このように社会変容は否定的に捉えられてきたが、近年その状況は変化してきた。2000 年に行われたシンポジウム「移動と伝統文化」において笠原は、漁労移動者を事例に近代の沖縄に新たに生まれた「伝統」に注目している。笠原は今までの文化人類学や民俗学の沖縄研究では研究者の関心が琉球王国時代やそれより古い時代に遡った起源を持つ事象に向けられてきたと述べ、

そのような研究での近代沖縄はただ琉球王国時代の文化や社会事象が「変化」「変貌」する時代としてしか捉えられていないことが多かったと指摘している（笠原 2002：57)。また玉城は、首里・那覇の無禄士族を中心とする人々が農村地域に移住して形成した部落である「屋取」を取り上げ、これまでの人類学・民俗学的沖縄研究の偏りを是正し新たなテーマ領域を広げることの必要性を指摘している。ここで重要なのは、両者が「移動者の実践」を主体的に捉えている点であり、このような視点の転換は現代沖縄においてもっとも必要であると考える。これまでも住民の基本的な生活母体であり行政単位であったシマ（村）が戦後の都市化の過程においていかなる性格のものに変化したのかということを、都市計画や経済学などの専門家にのみ委ねるのではなく民俗学・人類学の専門家も検討してみるべきであると指摘されてきた（津波 1996：466)。しかし先述したように、沖縄各地からの人口移動によって形成された都市においては「移動者の実践」について注目することで、「変容」を積極的に捉える方向性を見出すことができるのではないだろうか。特に古くて新しい問題である「墓をめぐる状況」は、「沖縄」研究における新たな視点を提供している。

4.「沖縄」における葬墓制とその変容

沖縄における墓制研究は、葬制とともに考古学、歴史学、民俗学、人類学などの立場から研究がなされてきた。その嚆矢として伊波の『南島古代の葬制』があり、柳田の『葬制の沿革』とともに民俗学の立場から日本の葬制について学問的に体系付けられたものとして評価されている（比嘉 1989：12－13)。その後、様々な分野から葬墓制は研究されてきたが、その多くが墓の形や洗骨などの遺体・遺骨への処置を通じた死者から祖先への過程、つまり死者観や祖先観に注目したものであった。

しかし現在、洗骨はほとんど行われていない。戦後の急激な都市化と火葬の受容により、洗骨は急激に減少した。沖縄県の火葬率の推移は 1942 年には 8.3%（同年全国平均 57%）であったが、1969 年には 73.9%（全国 77.5%）、1970 年には 78.8%（全国 79.2%）と戦後急激に上昇している（加藤 2004：90)。そして 1973 年には 85.3%となり、初めて全国平均 83.8%を上回ってい

る。その結果、火葬受容地域において新たに建設される墓は、墓郭内空間の縮小化が急速に進んだ。さらに時期を同じくして戦後の都市計画による区画整理に伴い出現した集団墓地は、区画された小規模な墓の出現の契機となり、年を追って増加している。これらの墓は 1951 年に沖縄群島政府によって施行された「沖縄群島、墓地埋葬等に関する条例」をはじめ、1959 年には琉球政府による「墓地、埋葬等に関する立法」の下で認可・建設されている。1972 年の本土復帰により日本国内法である「墓地、埋葬等に関する法律」が沖縄にも適用されるようになるが、これらの条例、法律はいずれも火葬骨の収蔵が前提とされている。

その後、財団法人、宗教法人による集団墓地が 1980 年代以降増加し、経済発展に伴い 1990 年代以降には急増している（沖縄県福祉保健部 2000：34）。その背景には、墓埋法や都市化の影響で都市部では個人の所有地において墳墓建設認可が下りにくいため、宗教法人や財団法人立の集団墓地へ墓を求めるものが増えたことが推測される。このような状況は、墓石業者や葬祭業者の中小企業にとってビジネスチャンスであった。集団墓地は草刈りの必要がないため管理がしやすく、駐車場やトイレが設置されているという点で、墓参りや清明祭[9]などの際にも便利という売り文句が、そのまま利用者に集団墓地の利点として認識されている。そして現在、沖縄県における火葬率は 99%を超えている（加藤 2004：90）。そのため新たに建設される墓の内部構造は、納骨する空間のみである場合がほとんどである。もちろん火葬場をもたない離島では事情が異なるが、島外に出て火葬場がある地域で亡くなった場合は火葬骨となって戻ってくるため、間接的に火葬を受容している。しかし従来の洗骨に関する研究は、かつて行われていた洗骨あるいは現在も行われている数少ない地域における洗骨について調査したものが多く、戦後急激に進行した洗骨から火葬への移行や変化について取り扱ったものはほとんど見当たらない。それゆえ、現在のように火葬が進行した状況のもとで洗骨から火葬への移行や変化を取り上げることは、死生観を考える上で重要な意義があるだろう（尾崎 1996：59－60）。

以上を踏まえ、先述した宮城による石垣島から島外への墓の移動における骨の取り扱いを振り返ってみると「これまで洗骨されている遺骨は合同

して焼き、小さくしてお供するようになっている」という短い説明の中にも、墓の移動時における「遺骨に火を入れる行為」と「遺骨をまとめる行為」という祀る側による二つの「操作」の存在が指摘できる。

これまで最終年忌における位牌の処理や、洗骨等の儀礼を経た後に遺骨を一箇所にまとめるというような没個性化の過程から祖先観について研究されてきたが、そのような没個性化がなされない事例も多く見受けられることから、祀る側による意図的に没個性化させる「操作」が必ずしも存在しないことが指摘されてきた（赤嶺 1996：83）。火葬が広い地域に受容された後は、それ以前に洗骨された遺骨も火葬された遺骨も個別の甕[10]に納められ風化に任せて徐々に小さくなっていた。しかし火葬骨の収蔵を前提として造られた新しい小規模な墓に移動する場合、遺骨に火を入れて一気に小さくし、また他の骨と一つにまとめるというような祀る側によって意図的に没個性化させる「操作」が行われる場合がある。そしてその「操作」が行われる基準には、祀る側の祖先観が影響している。祖先の認定は系譜上の繋がりを有していることを基礎においているが、祀る側の語りを詳細に分析すると没個性化させるか否かは年忌の有無だけではなく、例えば遺骨に対しても「お父さん」「おばあちゃん」と親族名称で呼び分けることなどから、祀る側と祀られる側の生前の「親密性」によって「祖先でないもの」が規定され、そこから「祖先」が照射されてくるといえる。このように、遺骨に対する具体的な処置の作業を通じた「墓」をめぐる祖先祭祀とその実践において、遺骨の処置を中心とする「墓の移動」はまさに祖先観を再認識、再構築する契機となっているのである（越智 2009）。

5．新しい「沖縄」研究に向けて

以上のように、筆者がフィールドに臨んだとき気付いたのは従来の親族論では見えにくかった「墓」の存在であった。祖先として祀られる側は、位牌に名を刻むだけではなく、その「遺体」「骨」となって墓に納められる。位牌祭祀の禁忌を祀る側の「操作」とすると、その「操作」は「骨」やそれを納める「墓」にも及んでいる。さらに戦後の急激な都市化と人口移動を背景として普及した火葬や集団墓地、行政による墓地政策・規制といった政治的経

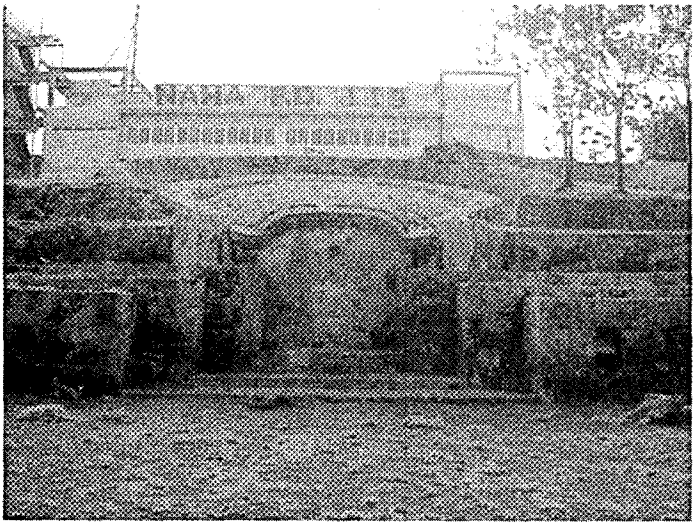
済的問題からは、複数の主体（agent）による「操作」の「相互作用」がみてとれる。先行する理論への重視から現実に起きている社会現象を取り上げてこなかった過去の研究を見直し、現実問題として人口移動、都市化の問題を積極的に扱ってきた社会学、地理学という周辺分野や移民研究も踏まえることで、今後の「沖縄」研究を深めていくことが可能になるだろう。例えば、同郷人結合組織である「同郷会」は、社会学において注目されてきた（石原1986）。「同郷会」は、同郷の人々が移動先での相互扶助を目的として設立している団体であるが、その中には同郷会の共同墓地や納骨堂を持っている会も存在している。相互扶助という目的だけではなく、なぜ移動先において墓が必要なのか、彼らにとって墓とはいかなる存在なのか、という命題に対しても人類学が沖縄において蓄積してきた親族研究や祖先祭祀研究の視点から研究する必要があるだろう。特に「墓の移動」は、「墓」や「骨」や対する認識を介して故郷観や祖先観を構成する系譜関係に関する価値観が明示される重要な契機となっている（越智 2008：20－21）。そのため、これまでの先行研究を踏まえ現代沖縄社会の葬制・墓制の現状を考慮しながら、「墓の移動」に関する「祀る側」の実践、さらには人々の語りを詳細に考察する必要が大いにある。

おわりに－地域研究を問い直す

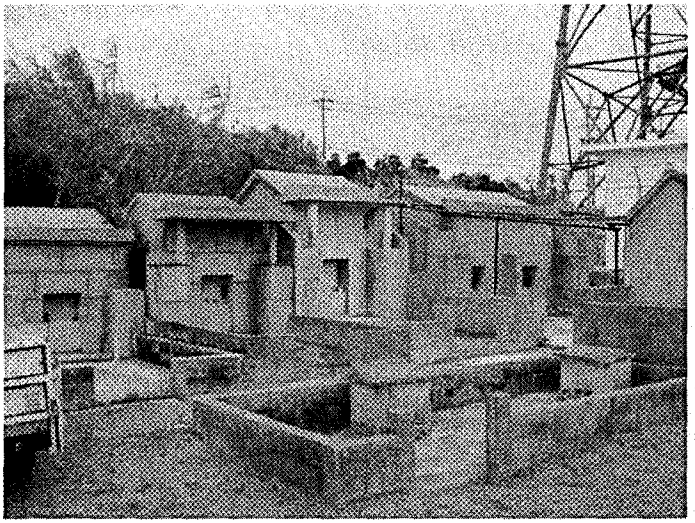
以上の議論からこれまでの沖縄における地域研究について再考してみると、「地域」は本島や宮古、八重山という括りのように、地理的に切り取られて捉えられることが多かった。そのため上述したように人口移動の激しさや「伝統」の枠内から外れる事象に対する研究がほとんどなされず、現実に起こっている事象が見過ごされてきたといえる。

このような問題は「沖縄」だけに限らず、現代における地域研究に共通した事項である。例えば加藤は、エジプトを事例に「地域」は区切られたまたは固定された地域だけではなく、場や関係のネクサス（束）として捉える必要性について述べている（加藤 2008：152）。また田中は、プラット（Mary Louise Pratt）の『帝国のまなざし』におけるコンタクト・ゾーン、すなわちヨーロッパを中心とする植民地宗主国と非ヨーロッパ地域との「接触」を

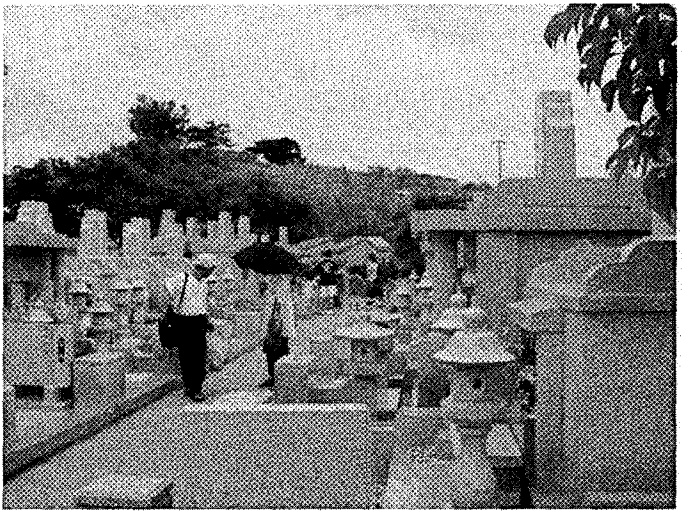
主たるコンタクト・ゾーンと想定している問題意識を継承しつつ、ポスト・コロニアルな状況で、またグローバリゼーションがかつてない勢いで進行していく状況で、コンタクト・ゾーンはいまやいたるところに出現していると述べる（田中 2007：31－32)。すなわちフィールドが、人類学者と他者との出会いの場すべてがコンタクト・ゾーンなのである。自己完結的な「伝統社会」が人類学の対象であったときには意図的に避けてきた異種混交的な場所は、現代のグローバリゼーションの時代に特徴的な新しいコンタクト・ゾーンである。そこに注目する意義は、選択的な人類学者の営みが孕む政治性を批判し、人類学そのものを再考する可能性が含まれているといってよいだろう(田中 2007：33)。現代沖縄というコンタクト・ゾーンにおいて、墓をめぐる複数の主体（agent）の動き、活動の場や関係の束をみることで、新たな「沖縄」研究を開くことができるのではないだろうか。今後マクロな動きに配慮しつつ、墓をめぐるミクロな動きに改めて注目していきたいと考えている。



【写真１】那覇市内某所の亀甲墓。背景に見えるのは消防署。都市化により墓と住宅地は隣り合っている。



【写真２】戦後増加したコンクリート造りの墓。「表札」がつくようになった。



【写真３】1980 年代以降増加した霊園墓地。旧暦七夕の様子。

註

[1] 「墓の移動」は「移葬」「改葬」ともよばれるが、ここでは「葬」の字をあえて避け、語りにおいて用いられる「墓を移す」という言葉から「墓の移動」とする。

[2] 笹森儀助（1845－1915）明治期に千島、沖縄、台湾、シベリアに及ぶ壮大な探検旅行を行い、克明な民俗誌的記録を残した（植松 2008：224）。

[3] 鳥居龍蔵（1870－1953）東アジアの諸地域を広く踏査した草創期の人類学者・考古学者。身体形質・言語・伝説などの知見に基づく日本人起源論は、伊波普猷の学問形成に影響を与えたといわれる（笠原 2008：369）

[4] 伊波普猷（1876－1947）那覇士族の出身で、東京帝大において言語学を修める。柳田や折口ら民俗学者と親交を持ちながら研究を行った（笠原 2008：34）。

[5] 東恩納寛惇（1882－1963）琉球史研究の歴史学者。東京大学史学科を卒業後、大学などで教鞭をとる。歴史研究では、沖縄各地の歴史・民俗の事項について丹念に記述・考察が加えられており、民俗学研究にとっても貴重な基礎文献となっている（萩尾 2008：435－436）。

[6] 日本と琉球（沖縄）が祖先を同じくするという説。人種（民族）的に起源を一つとする考え方と、文化の起源を一つとする説がしばしば並行して語られる（渡名喜 2008：393）。

[7] 同族とは、家を単位として共通の祖先を持つ本家分家の系譜関係によって結ばれた日本の父系単系的な親族集団。東北日本に分布するマキ、エドウシなど。社会人類学においては、同族を出自集団とみなすかどうか論争が起こった（上野 1987：518）。

[8] 沖縄における人類学（民族学）的研究は、1945 年までに発展した「沖縄学」を受けて「敗戦を契機として本土周辺の特殊地域における日本の人類学関係の諸科学がこれまで到達した研究成果を、反省を含めて総決算するとともに、その後に残された問題の所在を明らかにしておくために（窪徳忠 1973）」、1950 年『民族学研究』15 号第 2 巻において沖縄研究特集を組み、1962 年の第一回研究大会において沖縄緒文化についてのシンポジウムが開かれ、その成果が『民族学研究』27 号 1 巻に発表されている。さらに、民族学会や民俗学会などが集まり九学会連合として 1971 年から 1973 年にかけて調査を行っており、その成果を『沖縄－自然・文化・社会』（九学会連合沖縄調査委員会 1976　弘文堂）発表している。その後、日本民族学会が主体となり 1973 年に発行された『沖縄の民族学的研究－民俗社会と世界像』では、本島、宮古などの地域別の村落構造と祭祀世界、祖先祭祀、門中と同族との

比較、沖縄と周囲諸民族の神話比較、中国の民俗宗教の比較などの項目からなる論考が収められていることを付記しておく。
[9] 清明節に行われる墓前祭。親族が集まり墓前において焼香し、共食が行われる。
[10] 夫婦で同一の甕に遺骨を納める場合でも、甕に個別の名前没年等は銘書されている。

参考文献

赤嶺政信
1996「沖縄の祖霊信仰ー祖先は神になるか」梅原猛　中西進編　『霊魂をめぐる日本の深層』角川書店
石原昌家
1986『郷友会社会ー都市のなかのムラ』ひるぎ社
伊波普猷
1974「南島古代の葬制」『伊波普猷全集』第五巻　平凡社
上野和男
1987「同族」『文化人類学辞典』弘文堂
植松明石
2008「笹森儀助」渡邊欣雄、岡野宜勝、佐藤壮広、塩月亮子、宮下克也編　『沖縄民俗辞典』吉川弘文館
内堀基光・山下晋司
1986『死の人類学』弘文堂
沖縄県福祉保健部
2000『沖縄県墓地公園整備基本指針』沖縄県
尾崎彩子
1996「洗骨から火葬の移行にみられる死生観ー沖縄県国頭郡大宜味村字喜如嘉の事例よりー」『日本民俗学』207
越智郁乃
2008「墓と故郷ー現代沖縄における『墓の移動』を通じてー」『アジア社会文化研究』第9号　アジア社会文化研究会（広島大学大学院総合科学研究科）
2009「遺骨の移動からみた祖先観ー現代沖縄社会における墓の移動に関する

一考察ー」『沖縄民俗研究』27 号（掲載決定）
笠原政治
2005「帰郷者たちの伝統創出」『沖縄民俗研究』第 23 号
2008「伊波普猷」「鳥居龍蔵」渡邊欣雄、岡野宜勝、佐藤壮広、塩月亮子、宮下克也編　『沖縄民俗辞典』吉川弘文館
加藤博
2008「ナイルー地域をつむぐ川ー」刀水書房
加藤正春
2004「火葬と沖縄の葬儀ー火葬の導入による葬儀の再編成とその外部化」ノートルダム清心女子大学生活文化研究所『生活文化研究所年報』第 17 輯
鈴木満男
1991『柳田・折口以後ー東アジアにおける《民俗》のトポス』世界書院
田中雅一
2006「ミクロ人類学序章」田中雅一・松田素二編『ミクロ人類学の実践』世界思想社
2007「コンタクト・ゾーンの文化人類学へ」京都大学人文科学研究所人文国際研究センター『コンタクト・ゾーン 1』
玉城毅
2007「兄弟の結合と家計戦術ー近代沖縄における屋取の展開と世帯」『文化人類学（旧民族学研究）』72－3
崔仁宅　石川浩之　森雅文　渋谷研
1996「奄美・沖縄はどう語り得るか」『民族学研究』61－3
柳田國男
1969「葬制の沿革について」『定本柳田國男集』15　筑摩書房
津波高志
1996「対ヤマトの文化人類学」『民族学研究』61－3
日本民族学会編
1973『沖縄の民族学的研究ー民俗社会と世界像』民族学振興会
萩尾俊章
2008「東恩納寛惇」渡邊欣雄、岡野宜勝、佐藤壮広、塩月亮子、宮下克也編

『沖縄民俗辞典』吉川弘文館
比嘉政夫
1989「葬墓制研究の動向」沖縄県地域史協議会編『シンポジウム南島の墓　沖縄の葬制・墓制』沖縄出版
1996「琉球列島文化研究の新視角」『民族学研究』61－3
宮城文
1982（1972）『八重山生活誌』沖縄タイムス社
吉成直樹
2007「関係性の中の琉球・琉球の中の関係性」『いくつもの琉球・沖縄像』法政大学沖縄文化研究所編　法政大学国際日本学研究センター
渡邊欣雄
1990『民俗知識論の課題－沖縄の知識人類学』凱風社
1994『風水　気の景観地理学』人文書院
与那覇潤
2008「門中」渡邊欣雄、岡野宜勝、佐藤壮広、塩月亮子、宮下克也編　『沖縄民俗辞典』吉川弘文館
HARA,Tomoaki
2007 Okinawan Studies in Japan,1989-2007,*Japanese Review of Cultural Anthropology* Vol.8:101-136
Pratt,Mary Louise
1992 Imperial eyes:travel writing and transculturation. London : Routledge.

(ochiiku@hiroshima-u.ac.jp)